

白石秀一君を偲ぶ

伊藤俊方



平成17年8月10日未明、白石秀一君は上越市にて帰らぬ人となりました。当日午前中、突然の悲報に新潟の事務所の誰もが耳を疑いました。8月8日に、「これから上越に行ってくる」と言って元気に出かけていったのが彼との最後の別れでした。

新潟支店調査部長である彼は、この4月から上越営業所長という要職を兼務し、週のなかばを上越で過ごしていました。その単身赴任先のアパートで、心筋梗塞により倒れているところを社員により発見されましたが、すでに亡くなられていたとのことです。まだ52歳という若さで、これからというときに真に残念でなりません。

彼は新潟大学理学部地質鉱物学科を卒業し大学院を修了後、昭和53年4月に我が株式会社日さくに入社しました。新潟支店地質調査課に所属して以来、多くの地すべり・ダム・トンネル・道路などの地質調査を手掛け、また後輩の指導にあたってきました。当時、院卒というのはまだ少ない時代でしたが、彼は期待通りの頭脳派で仕事も堅実にこなし、上司のみならず発注者からも高く評価されていました。

昭和55年4月の仙台支店分離や、昭和59年4月の大異動にも、彼は新潟にとどまり、孤軍奮闘しました。平成になり景気も良くなると若手社員が増え、新入社員研修にも積極的に取り組んでいました。ダム関係では、佐渡の小倉ダムをライフワークのように担当し、また上越方面では名立川ダムや儀名川ダムの地質調査に携わってきました。ダム事業が少なくなる中で、彼は道路関係に力を入れるしかない、とくに地すべりと道路建設の関連において積極的に取り組むとともに、技術士やRCCMなどの資格も地質から道路にシフトすべきであると、部下を激励していました。

彼の学生時代のフィールドワークは姫川流域の来馬層群についての研究であり、平成4年に纏め上げた論文は、その後も多くの研究者に引用されています。その他、新潟大学地質鉱物学科の卒業生として、先輩・後輩の橋渡しの存在でもありました。

平成のバブル景気に支えられ、業界全体が好調のさなか、彼は平成7年に当時の長野支店に調査課長として転勤し、その直後に発生した7.11水害の災害対応や、長野冬季オリンピック等に関わる様々な調査業務をこなし、長野における人脈も広げてきました。

また、平成11年に発生した下石川地すべりでの活躍ぶりが長野時代の思い出としてあげられます。この地すべりは弱者施設への影響が懸念されたこともあり、一時長野県下でも大きく取り上げられました。この地すべりでの貴重な経験は、学会発表や論文等でも多く

*（株）日さく

紹介されています。

平成13年、長野での6年余りにわたる単身赴任生活を終え、調査部長として再び新潟へ帰ってきましたが、すでに地すべり事業は急落の一途にあり、受注量の減少に伴う雇用調整など、苦しい時代に直面しました。近年では、昨年の新潟県中越地震に伴う災害復旧にも、その才知を如何なく発揮したものの、その量は少なく、時代の流れから取り残された印象をもらっていました。災害関連もとりあえず一段落し、これから上越を盛り上げようとする意気込みで向かった矢先の突然の死は、真に悔やんでも悔やみきれなく無念であったことと思います。

彼の趣味のひとつに温泉雑学というか、地質地下水からみた温泉に興味を持ち、それはおそらく糸魚川-静岡構造線をめがけて掘削を提案した糸魚川温泉の成功からと思います。近年では長野県北部から新潟県内全域にかけての各地の温泉を巡り、いろいろなデータを収集していました。それらの一部はフォッサマグナミュージアム研究報告への投稿、あるいは新潟応用研究会での報告、などでしょうかうことができますが、彼が目指していたものは、もっと奥が深いものであったと思います。

彼のこの業界での活動としては、早くから新潟県地質調査業協会技術委員、地すべり対策技術協会新潟県支部技術研修委員などを委嘱されて活動していましたが、当新潟応用地質研究会や地すべり学会新潟支部の活動は、水谷が担当となっていたので、陰からの仕掛け人といった存在でした。新潟に戻ってからは、地すべり対策技術協会新潟県支部の技術研修委員長を務めるほか、中央においては地すべり学会編集委員を担当していました。この編集委員会で、彼は新たなプロジェクトを企画しその責任者としてスタートさせたばかりであり、編集委員会のみならず学会関係者に大きな衝撃を与えました。

また、金沢大学においては、田崎教授の開催する「ゆったり湯学」の非常勤講師も勤め、教授の指導のもとで書き上げたバイオマットに関する論文の印刷が出来上がったばかりの翌々日、本人はそれを手にすることなく旅立ってしまいました。

真に惜しい人材を亡くしました。我が社だけでなく、この業界における偉大なる損失だと思えます。告別式には全国各地から大勢の方々が弔問にこられました。これも彼の人物によるものと思われまます。

ここに謹んで心よりご冥福をお祈り申し上げます。

主な発表

- (1) 白石秀一・寺川俊浩・西田彰一 (1980) : ワイヤー式多層移動量計で観測された地すべり土塊挙動、第19回地すべり学会研究発表会予稿集
- (2) 白石秀一・寺川俊浩・西田彰一 (1981) : 地すべり発生期の一考察—特に¹⁴Cによる解析—、第20回地すべり学会研究発表会予稿集
- (3) 白石秀一 (1982) : 新潟県姫川流域の来馬層群について—特にその堆積物—、日本地質学会第89年学術大会発表講演集

- (4) 白石秀一 (1983) : 防止工事施工による帰納的考察—仁上地すべり地—、地すべり学会新潟支部シンポジウム講演集
- (5) 白石秀一・佐藤・大西吉一 (1985) : 新潟県南魚沼郡大和町で発生した岩盤地すべり、第24回地すべり学会研究発表会予稿集
- (6) 白石秀一 (1986) : 新潟県における温泉開発の近況、新潟応用地質研究会誌、28、33-42
- (7) 白石秀一・塚本・渡辺・小池 (1987) : 地下水排除工による地下水位低下量について—新潟県下の地すべり地を例として—、第26回地すべり学会研究発表会講演集
- (8) 白石秀一・塚本・渡辺・渡辺・小池 (1988) : 地下水排除工による地下水位の低下について (その2)、第27回地すべり学会研究発表会講演集
- (9) 白石秀一・鴨井幸彦 (1990) : 新潟県南魚沼地域の中新統 (城内層群) から産出する植物化石について、日本地質学会第97年学術大会発表講演集
- (10) 白石秀一 (1991) : ソ連・中国・日本自然災害シンポジウム参加報告 (その1)、地すべり技術、56-63
- (11) 白石秀一 (1992) : 姫川中流域の飛騨外縁構造帯—特にジュラ系来馬層群について—、地球科学、46、1-10
- (12) 白石秀一・会津隆士 (1992) : 地下水排除工の効果について、第31回地すべり学会研究発表会講演集
- (13) 白石秀一 (1993) : 中国西北部の地すべりと土石流、新砂防、45、6、52-57
- (14) 白石秀一・白倉政道 (1993) : 地すべり地で実施した高密度電気探査・地温探査、第32回地すべり学会研究発表会講演集
- (15) 白石秀一・藤原・土屋・藤本 (2000) : 長野市下石川地すべりの地質とメカニズム、第39回地すべり学会研究発表会講演集
- (16) 白石秀一 (2001) : 関田山脈に分布するマスマーブメント堆積物の年代測定データ、新潟応用地質研究会誌、56、33-48
- (17) 白石秀一・竹内均・植村武 (2001) : 長野県小谷村における糸魚川・静岡構造線の新露頭、地球科学、55、1、55-59
- (18) 白石秀一 (2002) : 新潟県各地に分布する斜面堆積物の¹⁴C年代、新潟応用地質研究会誌、59、43-53
- (19) 白石秀一 (2003) : 糸魚川温泉井戸の地質と糸魚川・静岡構造線、フォッサマグナミュージアム研究報告、2、1-13
- (20) 白石秀一 (2005) : 新潟県における温泉開発の歴史、新潟応用地質研究会誌、63、39-53
- (21) 白石秀一 (2005) : 片山津温泉のなぞと温泉掘削、面白く楽しい片山津温泉学、30-36
- (22) 白石秀一・高橋・霜島・朝田・渡辺・田崎 (2005) : 井戸揚水管外壁に形成されたZn-SバイオマットとFeバイオマット、粘土科学、44、4、176-190